

いふ。いつも味の變らないのは「シロカハ」「クロカハ」である。鰯は東京では小さいとき一寸から七八寸を「ワカシ」一尺三四寸を「イナダ」二尺位「ワラサ」三尺より鰯と云ひ四尺で四貫目位までになる。

鱸は小さくて八寸位の時を「セイゴ」二尺以上を鱸と云ふ。鱸は夏うまい「セイゴ」は冬でもあまり味が落ちない。

イシナギと云ふ魚は「メダヒ」と云ふ事がある別にメダヒとよぶものがあるけれどもこれもメダヒと云ふ、シマダヒを東京では「タカノハダヒ」と云ひまづいものをさす。この邊で云ふ「ハタ」は大坂で「マス」長崎では「アラ」と云ふが種類は一寸十二種程あつて普通の人にはあまり食べぬがうまい魚である。この中で「ハタ」はうまいと云つてもうまくないものもある。それは赤ハタである一番うまいのはコハタであるこれは夏うまい。長崎ではアラ料理と云ふものはなかなか上等な料理となつて居るアラの頭は鯛よりも長崎では高いそうである。

鯛には赤いのと黒いのとある黒鯛には二種あつて赤鯛には五種あるがそのうち四種は東京に来る。

Pagrosomus major	真鯛
Evynnis cardinalis	チ鯛
Taius tumifrons	ヒ鯛
Parargyrops edita	チコ鯛
Argyrops spinifera	(日本には少い)

東京では鯛より高いのはアマ鯛である。關西ではみづぼいと云つてあまり好まない。是は冬うまいが關西では夏

食べる。(アマダヒ)には三種あつて「アカシ」「シラカワ」「キアマ」が是である。「キアマ」が一番少くてまづい白皮が一番うまい「アカ」が一番高い尾鰭をみると「アガ」と「シロ」はよくわかる「アカ」は横に赤筋があるし「シロ」はぼんやりして白ぼい。「イトヨリ」東京には二種あるが鹿兒島あたりでは殆ど両方同じ位である。東京では五百匹の中まづいもの一匹位しかまづいてゐない鰻のところに赤い點の三つあるものはよい「イトヨリ」である。(文責筆記者にあり)

### 肝臓デストマの第一中間主に就て。

岩川教授

斯かる表題の中央醫學會雜誌第百三十八號の抜刷一が昨日愛知醫學士武藤昌知といふ面識のない一紳士から到來致しました。表紙の傍に(御禮岩川教授殿)と記してあるから不審に存じて緒文を讀んで見ると其の不審も忽ち晴れ、想ひ起したのは去年の暮か本年の春であつたか確とは記憶せぬが未だ面識のない此の方から、今度同氏が肝臓デストマの第一中間宿主なりとして發表せられた其の貝の學名を尋ね越されたのであります。依て其の貝の標本を御覽に入れ、併せて其の寄生蟲に關する事實を簡単に御紹介致さうと存じたのであります。

肝臓デストマ病は東洋に固有の病氣で、其の病原體たるデストマ *Clonorchis Sinensis* (Cobbold) は明治七年頃印度カルカッタ市の病院で肝臓病の爲に斃れた一支那人に始めて發見せられ、本邦では明治十六年或は其の以前から岡山縣

で醫者が屢々視て居つたらしい、併し同年醫科大學に居られたベルツ氏が本國獨逸にこれを發表して以來世の注目を惹き、本邦内地では此の病氣廣く蔓延し、特に岡山及び宮城二縣の某郡村には一種の地方病と成りて流行し居ること等が知れました。

飯島博士は寄生動物の専門家である所から明治十八九年頃岡山宮城の二縣へ出張し、該寄生蟲傳播の經路を調べられ、其の外諸氏の實驗に依て淡水産の小魚が確に人體にこれを傳へる媒介者たることは分りましたが此の魚の體に來て未熟の幼デストマと成る前、即ちセルカリアの發生する經路が爾來三十餘年間杳として音信が無かつたのであります。最も其の間に小林晴次郎氏がカハニナ *Melania libertina* Gould. を以て肝臟デストマの第一中間宿主と發表したこともあつたが、一般に認められずして、ツイ此の頃出版せられた飯島博士の動物學提要中、本種寄生蟲の下にもタナゴ、モロコ、フナ等十數種の淡水魚が恐らく本蟲の第二中間宿主なるべきも、其の第一中間宿主は未だ判明せずと言つて居る。武藤醫學士の實驗の結果に依ると、其の永い間不明であつた第一中間宿主が愈々發見された譯でありますから、眞に氏の名譽であると存じます。

此の第一中間宿主たる貝は、淡水に産する小螺で學名を *Bithynia striatula* var. *japonica* Pilsbry といひ、二十餘年前私は琵琶湖に始めて採集し、マメダニシといふ和名を附けたものであります。私は琵琶湖以外では、因州の東郷池と常州の霞ヶ浦と丈であります、武藤氏の報告に依りますと、岡山

縣下妹尾町附近諸村の川溝には無數に蕃殖し、又宮城縣本吉郡柳津村附近にも氏自ら此の貝を採集し、而して此の兩地方は肝臟デストマ病の有名なる流行地であるといふ。其の他、京都大阪の二市、千葉、茨城、滋賀、佐賀等の諸縣にして此の貝の産地として知らるゝ地方は、文獻上悉く該病の流行地なりと言はれ、彼の片山病の流行地域が其の中間宿主たるカタヤマガヒの分布域に符合すると一對にして、甚だ面白く思ふ。

先刻、本日の講演者田中君と動物實驗室で對談し居る中に、平島君がアルコール漬の小魚を出して同氏に其の學名を質された。此の小魚は、先年卒業された松本春野氏が岡山で肝臟デストマを研究せられた人から、該蟲の中間宿主だといつて貰ひ受けたのを更に學校へ寄附されたのだと聞きましたから、夫は甚だ面白い、偶然二種の中間宿主が茲に揃つた譯でありますから、序に其の魚類の標本をも持參して御覽に供したのであります。

今日迄第二の中間宿主として知られたる淡水魚は次の拾壹種であります。

1. *Paracheilognathus rhombeum* (Temm. & Schleg.)

カネヒラ、ヒラザコ(田中)、ボテ、タビラ、ヒラボテ(滋賀)、アブラセンバラ(岐阜)

2. *Acheilognathus lanceolatum* (Temm. & Schleg.)

ヤリタナゴ(田中)、アブラジャコ(滋賀)、ボテ又ハカメンドウ(岡山)

3. *Acheilognathus limbatum* (Temm. & Schleg.)

タナゴ(東京)、ボラ(滋賀)センバラ(岐阜)

4. *Pseudoperilampus typus* Bleeker.

ゼニタナゴ、ニカブナ(田中)、ヨコタビラ(宮城)

5. *Sarcocheilichthys variegatus* (Temm. & Schleg)

ヒガイ、アブラバエ(滋賀)、サクラバエ(岐阜)

6. *Abbotina psegma* Jordan & Fowler.

トロモロコ(田中)、スナホリ(岡山)

7. *Biwia Zezera* (Ishikawa)

ゼゼラ(滋賀)

8. *Leucogobio Güntheri* Ishikawa.

ホンモロコ、ツチモロコ、タモロコ(滋賀)、ハエ、ヤナギバエ(岡山)

9. *Pseudorasbora parva* (Temm. & Schleg.)

モロコ、ハヤ又ハハエ(岡山)、ヨシツツキ、チヨウセンモロコ(滋賀)、アブラブナ(信州)

10. *Carassius auratus* (Linn.)

フナ

11. *Mogurnda obscura* (Temm. & Schleg)

ドンコ(伊豫大分)、グヅ(加賀)、ゴウソ(土佐)

此の寄生蟲に就て更に詳しく知りたいと思ふ方は次の二書を御覧なさい。

- 一、宮島博士著動物と人物
- 二、小泉丹著人體寄生動物

## 下水道に就きて

理 四 {宇田いと、小林かね、小島みさを、  
近藤千香子、秋山のぶ、平野千代}

文明國の都市は其の公衆の保護及び防火設備として決して上下水道の設備を缺くべからず。しかるに我國にては上水は東京市に於て三百餘年前に既に小石川水道(神田上水)を有しついで玉川上水を通じ不完全ながらも上水の設備備はりしも下水に就きては殆ど留意せらるゝ事無く唯溝或は濠などが運輸疏水又は防備の爲に經營せらるゝと同時に排水路の用をなすが如き有様なりき。しかるに歐洲に於ては割合に發達せる歴史を有し彼の「ポンペー」「ローマ」等の舊都市は早くより下水道の設備を有し今日なほ使用に堪ふるものありといふ。二千餘年の昔に於てすら斯の如くありしことを思へば我國に於ける、三百餘年前の上水道設備は敢て誇るに足らざるの感あり。歐洲諸國に於ても前述の舊都市を除きては殆ど下水道につきて留意せらるゝこと無かりき。しかるに近世科學の發達につれ下水道と公衆衛生との間には離るべからざる關係あることを認め追々これに留意するに至れり。かつてベッテンコウフル氏は上水道と下水道とか公衆衛生に於ける地位に關して次の如く述べられたり。

あまたの例證によりて傳染病は純良なる水を給するとも其の全滅は期しがたきものなり。却つて排水工事を起し土地の不潔を除き去りてはじめて病源を除去し得るものなり。例へばミュンヘン市はかつて水道工事を起して清